

震災後の子どもたち(10)

更地のカボチヤ

森末 哲朗

どんぐりクラブ(六甲学童保育所)の小さな庭には、実のなる木が三本植わっている。

一本はダイダイ。ここへどんぐりが移転してきた十三年前には、ぼくの背丈よりも高い木になっていた。よく実をつけるのだが、そのまま食べてもすっぱいだけなので、たいがいはいちマーマレードにして、子どもたちのおやつ時にパンにつけて食べている。地震に襲われた年は、例年の倍ほど実をつけた。同じ庭のビワの木もまた、粒は小さいけれど、枝も折れんばかりにびっしりとオレンジ色の実をつけ

た。

なぜこんなに実がつくのだろうと不思議に思っていることが、会話の中にも出てしまうのだろうか。知人と「お宅はどうでした?」「うちは全壊ですわ」「うちは、一部損壊ですわ」と、まずは地震による被害の様子を確かめ合い(九五年の会話はほとんどこんな感じで始まった)、そのうち実のなる木に話が進展する。すると相手も、「おたくも? うちのビワもびっくりするほどたくさんあった」という返事が返ってくるのだが、少なからずあった。



ぼくはその時、こんな風に想像した。——激震のために倒れてしまった樹々があった。生き残った木は、自分の子孫を残すために旺盛に実をつけ、種を残そうとした。ビワはビワなりに、柿は柿なりに、松の木はもしかしたら普段の年以上に松ボックリを作ったかもしれない。

こう想像するに足りる事柄はいくらでもあった。カボチャもその一つだった。

街のあちこちが更地になってしまい、まだ雑草さえも生えてこない黄土色の地面から、つるを持った緑の葉がポツンと存在を主張している。近づいてみ

ると、カボチャだった。

誰かが種を播いたという風情ではなかった。

更地のままでは寂しすぎるから花の種を播こうかというボランティアは、神戸の街のあちこちで活躍していたが、カボチャの種を播いたというボランティアの話は聞いたことがない。にもかかわらず、あの更地、この更地でカボチャに出くわした。

恐らく、台所のどこかに置いてあったカボチャが家の解体とともにつぶれ（または地震直後に家ともにつぶれたのかもしれない）、その種が地面に残り、夏を迎えて芽を出したのだろう。その呆れるほ



どに強い生命力を持った植物は、出会うたびにぼくを励ましてくれた。しんどいことが重なって、ぼくの心が栄養を求めていたためだろうか。

更地で成長を続けているカボチャを見ていると、運命に抗わずさりげなく、しかし力強く生きているそのことで、無言の激励をもらったものだ。

ビワ、ヤダイダイたちがあんなに実をつけたのも、倒れてしまわないうちに子孫を残す準備をしているのだと考えていた。

しかし後日、知人が違う解釈を与えてくれた。

「あれはなあ、森末さん、地面が揺れたことで、土の中にようけ空気が入ったんや。カチカチやった土がほぐれて、根の働きが活発になったんや。それで、いっぱい実がついたっっちゃうわけや」

はあ、そうですか、と一応は納得した気分になったのだが、あまりまとも過ぎて面白くない。

命が尽きようとするときに、次の命を生むために、草も木も燃焼するのだと考えたい。

どんぐりの子どもたちだって、あの地震のために命を失った子は一人もいなかったが、長く続いた余震の中で恐怖におののく夜を幾度も幾度もくぐり抜けてきた。同時に、はじけるような笑い声を、朝どんぐりにやって来て、夕方に帰るまでの間、毎日発散させて暮らしていた。

夜になると訪れてくる恐怖と、昼間の燃焼とが激しく対比される毎日だった。

おとなも子どもも、死を意識して暮らしていた。その分だけ生が輝いていたような気がする。

あれから一年が経ち、よく言えば生活が落ち着きを取り戻してきた。しかし、悪く言えば、人と人との支え合うことなしには今日一日さえまわっていかなかった日のことを、序々に忘れかかっている我々がいる。

ビワの実は、今年は去年ほどには実らなかった。

(六甲学童保育所どんぐりクラブ指導員)

子ども心のケア

どんぐり便り第二号より

——日記を通して

▼地震から二週間たった二月一日、村上指導員宅を開放してもらって、どんぐりクラブがスタートしました。

これまでずっと続けていた日記活動も再開しました。

(中略) 仲間たちとの共同作業として日記活動がなされているので、自分以外の誰かの身に起きたこと起きていることを識ることができます。

▼二月二十四日のNの日記は次のようでした。

「どんなのかな」

マンションの前がこうえんになる。

できたら前がにぎやかになるしあそべる。

でも、いまはきもちわるい。

生活をつづったりアリエーのある日記は、必ず皆に読んで聞かせることにしています。

この日記を読んだら、同じブロックに住んでいて、家が全焼してしまったHが怒りだしました。

「おまえなあ、おれとこ、まるやけになってんぞ!」

彼の家一帯が全焼し、そのあと新しい家が建つのではなく、公園になるらしいという話です。Hがその腹立たしさをNにぶつけました。「きもちがわるいとは、なんや!」。Nは一瞬、ハッとまりました。

そんなことがあって数日たち二月二十八日、二年生のKが次のような日記を書きました。

「Hくん」

かわいそう、Hくん。

家が公園になっちゃうなんて かわいそう。

(中略) KはHに同情的です。他の子もおおむねそんな気持ちのようです。Kのこの日記を読んだら、Hは少し嬉しそうな顔になりました。

日記活動がひとりひとりの被災体験を共有するための手段として生きていることを感じました。

(95・3・30 どんぐりクラブ発行)